

青丘文庫研究会 月報

No.280

2015年6月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (公財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 ①在日朝鮮人運動史研究会関西支部 (代表・飛田雄一)
 ②朝鮮近現代史研究会 (代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 ※他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

第296回朝鮮近現代史研究会 (2014年12月7日)

「満洲国」の宗教政策と朝鮮キリスト教運動 田中 隆一



本報告の目的は「満洲国」(以下、「」を省略)における宗教政策について、キリスト教を中心に検討するとともに、一九三〇年代中国東北地方(旧満洲)における朝鮮キリスト教会の活動とその歴史的意味について考察することである。本報告の内容を要約すれば、次のようである。

第一に、満洲事変直後には戦乱の影響と中国共産党、また東北抗日義勇軍の攻撃により朝鮮キリスト教会の信者や教役者に犠牲者が出ていた。そうした状況のなか、朝鮮キリスト教会では関東軍に依拠して自らを防衛するほかなかった。一方、満洲国政府は反共主義と、教会の背後にある国際社会からの承認を得る目的からキリスト教を容認、または活用する価値を見出していた。しかし同時に、抗日運動との関係、および欧米本国との関係から教会勢力に対する監視を怠らなかった。

第二に、日中戦争期には本格的な宗教統制が着手され、満洲国建国の精神に違背するとみなされた宗教団体は弾圧され、設立許可を得た教団を統制しようとした。そのため、満洲国政府では深度ある宗教調査事業を実施し、キリスト教とその宣教師に対して厳しい統制を加えた。他方、朝鮮キリスト教会側でも朝鮮人農民の集団部落や開拓農民を対象に、新たな信者を獲得し、教勢を拡張する契機とみなしたが、これは植民地支配政策に便乗する性格を有した。

第三にアジア・太平洋戦争期には朝鮮キリスト教会をはじめ、各宗教団体は戦争協力のための翼賛機関となり、慰霊祭や農作物供出運動、飛行機献納運動を展開した。

以上のように、中国の抗日運動側には歴史的にキリスト教を欧米列強の侵略と見る視角を有していたため、朝鮮キリスト教会を日本帝国主義の侵略の走狗とみたのは当然であった。そのため攻撃対象となった朝鮮キリスト教会は自衛手段として日本軍に依拠せざるをえない状況にあった。朝鮮人満洲移民の増加はキリスト教会にとって教勢拡大の契機であったが、植民地支配当局は元来、抗日的民族主義的性格を有する朝鮮キリスト教の教勢拡大を脅威とみなし、弾圧を加える一方、戦争協力者へと導いていった。日本の敗戦後、中国の国共内戦の過程で朝鮮キリスト教会は中国共産党軍により攻撃対象とされたが、それには右に見たような歴史的背景が存在したのである。

第299回朝鮮近現代史研究会（2015年3月8日）

大韓民国 1948年南北協商の展開—金九・金奎植の対応 李景珉

1945年12月、米・英・ソ三国外相会談の結果発表された「モスクワ協定」は、朝鮮独立の道順を初めて具体的に規定している。協定の内容は、朝鮮の臨時政府の樹立を明示し、米ソ共同委員会を設置してその問題を協議する、完全な独立の達成まで今後5年間、米・英・中・ソの信託統治下に置かれると明記している。

ところで、翌年3月、さらに1947年5月ソウルで開催された米ソ共同委員会は、協議対象の朝鮮の政党・社会団体の選定をめぐる米ソ間に意見の対立が続き、会談は頓挫する。米国はソ連との直接交渉を断念し、1947年9月朝鮮の独立問題を国連総会に持ち込む。ソ連は反対を表明し、連合国の援助並びに参加なしに、米ソ両占領軍は同時に朝鮮から撤退し独立政府の樹立を朝鮮人民自らの手にまかせることを提案する。だが、ソ連の主張は受け入れられず、国連総会が米国提案の案件を審議することになる。

1947年11月14日、国連総会本会議は米国提案の国連監視下で総選挙を実施し、朝鮮の国民政府を樹立する決議案を可決。朝鮮全土を自由に旅行し、観察し、かつ協議する権利を有する国連臨時朝鮮委員会（団）（United Nations Temporary Commission on Korea）が設置され、翌年3月末までに総選挙を実施することが決議された。国連臨時朝鮮委員団は1948年1月8日ソウルに到着。しかし38度線以北への立ち入りを拒まれ、朝鮮全土での総選挙は危惧されていた通り空論かと思われた。しかし国連中間委員会（小総会）は、1948年2月26日「国連臨時朝鮮委員団が接近することが可能な朝鮮の地域内において総選挙を実施する」米国提案を可決。それは、事実上南に単独政府を樹立することを意味し、朝鮮民族の分裂と国土の両断を永久化させる決定に他ならなかった。

さて、こうした状況に直面して、金九と金奎植は朝鮮民族による「打開」を求めて統一政府の樹立を模索する。二人は共に保守右派の指導者で、大韓民国臨時政府の主席・副主席を歴任した人物である。1945年11月中国での亡命生活から帰国して、朝鮮民衆の烈々な歓迎を受けた。

米軍当局は「亡命政府」の存在を認めなかったが、個人として帰国した二人を歓待した。ホッチ米軍司令官は、李承晩を敬遠してまで一時、金奎植には期待を寄せていた。金九の強力なリーダーシップ、非妥協の民族主義、金奎植の高い見識、判断力は誰もが認めていた。

金九は国連を高く評価し、臨時朝鮮委員団に「南北の政治要人の協商」と「全国で総選挙の実施」を主張した。彼は、米ソ両軍の同時撤退後に生じる「真空状態」の監督者として、国連の存在は欠かせないと述べた。「国連は信託のない、公平な監視によって、完全な自主独立の政府の樹立と、その後米ソ両軍の撤退を約束した。いま、不幸にも、ソ連のボイコットによって臨時朝鮮委員団の事務進行に妨害がないでもない」と述べている。（朝鮮日報1948.2.11）

金奎植は金九の意見に同意したが、「全人口の3分の2を持つ南に中央政府が誕生し、それを国連が承認する、南北の統合が実現できるなら、南の単独政府誕生も再考の余地あり」と折衷の可能性を示唆した（東亜日報1948.1.28）。

保守右派の韓国民民主党は金九を猛烈に非難し、南だけの早期選挙の実施・単独政府の樹立を主張、一方、左派（南労党）は米ソ両軍の撤退、国連を排除して全国総選挙の実施を主張した。

金九・金奎植は2月16日、北の「権力者」である金日成・金科奉に手紙を送付し、「南北政治指導者間の

政治協商で統一政府の樹立と民主国家の建設に関する討議」を提案した。

北からの返答は、3月25日平壤放送によって知らされた。北は「金九・金奎植先生に送る送信」と「南朝鮮政党・社会団体に送る手紙」を個別的に伝達してきた。要約すると、

「2月16日の書簡を受け取った。国連の決定、国連小総会の決定には賛成できない。ソ連の提案が否決され、国連監視下の総選挙実施には賛成できない。われわれの問題をわれわれが解決しようとする趣旨で、南北朝鮮の小範囲の指導者連席会議を1948年4月初め平壤で召集することに同意する。」という内容であった。

北の回答が遅れた理由は明らかでないが、その間、平壤放送が2月16日「朝鮮人民軍」が創建されたこと、人民政府樹立のために新憲法は3月中旬には採択されることを発表している。(朝日新聞、1948.2.18) 2月26日国連小総会の決定があり、3月1日、南の総選挙日が5月9日に延期・確定されたことなど、北は一連の流れを注視しての決断であったのかもしれない。

北の書簡は、指導者連席会議への参加人数を総数25名に、北10人、南15人に配分している。南の参加者は金九、金奎植、趙素昂、洪命憲、白南雲、金朋濬、金一清、李克魯、朴憲永、許憲、金元鳳、許成澤、劉英俊、宋乙秀、金昌俊であり、右派2人、中間派5人、左派8人という形をとっている。

一方、北は金日成、金科奉、崔鏞健、金達鉉、朴正愛他5名で、討議の課題は、朝鮮の政治現象に関する意見交換、単独選挙の実施に反対する闘争、朝鮮の統一と民主主義政府樹立についてと明示している。

こうした北の返答は、北の一方的な集会の形式であり、南の情勢に対する北の戦術とも思われ、金九と金奎植は苦渋の決断に迫られた。金九は、米ソの力だけでは朝鮮問題を解決することが出来なかった、朝鮮民族同士で話しをするのが真意であり、北行きを決定したと承諾した。(朝鮮日報 1948.4.17)。金九は、彼の北行きを阻止する人々を避けて、4月19日自宅の裏門から北へ出発した。金九の出発の知らせで、洪命憲がその日の夜出発し、趙素昂なども政党・団体のメンバーらと北行きを始めた。

金奎植は消極的な態度で臨んだ。金奎植は一番遅れて、4月21日随行員12名と38度線を越えた。北が政治的・組織的に行動したのとは対照的に、南はバラバラに北行きを敢行したことになる。

南北代表者連席会議は、4月19日に予備会談が、その後本会談が行われたが、本会談には南北の政党・団体の代表545名が参加して平壤市の牡丹峯劇場で開催された。最終的には南からの参加者が増え395名に、北の参加者300名で合計695名が参加した。金日成が「北朝鮮政治情勢」を、白南雲と朴憲永が「南朝鮮政治情勢」を報告した。だが、それには金九、金奎植は参加しなかった。連席会議は23日、「単独選挙の実施は朝鮮の分裂を永久化させる」という「南朝鮮の政治情勢に対する決定書」を採択し、26日には「単独選挙を承認せず、断固反対する」米ソ両国政府に送る「要請書」を採択して、28日閉会した。「四人の金氏」の会談は、4月26日、30日に行われ、討議された内容は、30日に発表された「共同声明書」に含まれている。

金九・金奎植は、総選挙直前の5月5日ソウルに戻った。翌日、両氏は「われわれの北朝鮮訪問は、祖国の統一を渴望する同胞の期待に答えるものであり、主義と党派を超越して団結することができることを行動によって証明するものであった」という「共同声明」を発表した。

しかし、南から南北協商に参加した人々はほとんどが5月10日実施された総選挙にボイコットしたものの、選挙を阻止することはできなかった。

金九・金奎植との会談に臨んだ北の指導者たちも二人に、「単独政権の樹立」は絶対しないと約束した。

だが、6月初旬、北は再び金九・金奎植に海州会談に参加することを要求したが、金九・金奎植は「南に単独政府が樹立しており、北も同じことをするとのことは、民族の分裂行為に他ならないと非難する答申を送付した。北は、自分たちの主張を正当化するために「南北協商」を利用したのだろうか。しかし、解放後一度も南北の指導者らが集まって民族の問題を討議する場を持たずに歳月をすごしていたことを考えれば、「民族の願い」をかなえたということで応分の役割を果たしたともいえよう。せめて、そうしたことが指摘できるのではないだろうか。

●青丘文庫研究会のご案内●

■朝鮮近現代史研究会はお休みです。

■第359回在日朝鮮人運動史研究会関西部会

2015年6月14日(日) 午後3時～5時

「在日韓国・朝鮮人の参政権と国籍」 高希麗

※会場 青丘文庫(神戸市立中央図書館内、TEL 078-371-3351、新館3階で身分を証明するものだして入館証を受け取り4階会議室にお越しください。)

※日韓共同在日研究会は、8月8日(土)～9日(日)、神戸学生青年センターで開かれます。

●あなたの両手とからだで顔で、韓国語手話を覚えませんか? <韓国語手話講座>

講師: アンダンテ サンヨンさん(韓国ソウル出身。)

開催日 2015年7/2、9、16、23、30

毎週木曜日 19:00～20:30/会場 神戸学生青年センター・会議室

受講料 5,000円(5回分)/定員 15名※3名を下回った場合は開講しません

申込み6/25(木)までに学生センターまで。

●朝鮮史セミナー 「戦後70年、日韓条約50年」

■6月18日(木) 18:30 「日韓条約から50年—植民地支配・戦争責任は解決済みか」太田修さん

■7月29日(水) 18:30 「戦後70年と在日朝鮮人」水野直樹さん

会場: 神戸学生青年センターTEL078-851-2760/参加費: 各回800円/主催: 学生センター

●現代キリスト教セミナー 「韓国キリスト教の特徴」梁明洙さん

日時: 7月1日(水) 18:30/会場・主催: 神戸学生青年センター

●神戸・南京をむすぶ会第19回訪中、南京と広州を訪問します。8/12～19、<http://ksyc.jp/nankin/>

【今後の研究会の予定】 来月以降の予定。7月12日、在日(関ジホン)、近現代史(伊地知紀子)、8月はお休みです。研究会は毎月第2日曜日です。報告希望者は、飛田または水野まで。

【月報の巻頭エッセイの予定】 7月号以降は、太田修、高正子、坂本悠一、全淑美、足立龍枝、渡辺さえ、池貞姫、張允植、横山篤夫、松田利彦、西村寿美子、玄善允、川口祥子。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。